

Contents

特集：アイオワとニューハンプシャーのドラマ	1p
< 今週の”The Economist”誌から >	
”A call for change” 「変化を求める声」	8p
< From the Editor > 予備選挙は特権か？	9p

特集：アイオワとニューハンプシャーのドラマ

2008 年の冒頭 10 日間、米国大統領選挙のドラマは急展開しました。

まず 1 月 3 日、バラク・オバマ上院議員がアイオワ州党員集会で価値ある初勝利を挙げました。支持率で逆転され、涙まで見せたヒラリー・クリントン上院議員は、続く 1 月 8 日のニューハンプシャー州予備選挙で奇跡の復活劇を遂げる。他方、共和党では出遅れていたジョン・マッケイン上院議員が、指名獲得に向けて大きく前進しています。

いつも感じることですが、米国大統領選挙予備選には「ドラマを生み出す仕掛け」がビルトインされています。そうしたダイナミズムをまざまざと見せつけた、2008 年冒頭の 10 日間を振り返ってみます。

第 1 幕：アイオワのサプライズ

IA 州の結果は、 オバマ：37.6%、 エドワーズ：29.7%、 ヒラリー：29.5%

ある政治マンガは、複雑な表情でテレビを見つめる黒人少年の姿を描いている。画面にはオバマ候補が”Change is coming.”と語っていて、”IOWA Obama wins.”という文字が浮かんでいる。なるほど、この絵が米国政治の「変化」でなくてなんだろう¹。「人口の 95%を白人が占める州の党員集会で、黒人候補がトップに立ち得る」という事実それ自体が、全米に深い驚きをもたらすものであったことはほぼ間違いない。

¹ <http://www.cagle.com/news/HillaryLosesIowa/6.asp>の中段の絵を参照。

1月4-5日付のWall Street Journal紙は、「The Iowa message」という社説で大胆にもこんなふうに時代の変化を評している。

われわれは以前から、この国はすでに黒人大統領を受け入れる準備ができていると考えてきた。もしもコリン・パウエルが以前に出馬していたら、彼は当選していたかもしれない。オバマ氏は、人種に関わる訴えをはっきり避けた、初めてのアフリカ系の本格的候補者である。ジャック・ケネディがカトリックだったのと同様、オバマ氏が黒人だということは、彼の政治的なキャラクターのごく一部に過ぎない。彼の成功は、米国政治史の新たなページを開くものである。

2004年の民主党大会の基調演説で、オバマは「黒人の米国も、白人の米国も、ラテン系の米国も、アジア人の米国もない。ただアメリカ合衆国があるだけなのだ」と訴えた。そして彼は、実際に人種の壁を超えることに挑戦している。だとすれば、民主党と共和党の党派的对立も乗り越えられるはずではないか。そこにオバマのメッセージの重さがある。

逆にヒラリーが当選してしまえば、党派的对立がさらに続く怖れがある。昨年12月15日号の「The Economist」誌は、「At home, he would put an end to America's depressing and vicious version of medieval England's dynastic Wars of the Roses.」（オバマは英国中世の薔薇戦争のような、陰鬱でいかがわしい王朝交代の米国版に終止符を打つことができる）と皮肉たっぷりに指摘している。ランカシャー家とヨーク家の争いは、1455年から1485年までの30年にわたったが、ブッシュ家とクリントン家のそれは1988年から2016年まで続くかもしれない。なるほど、これでは薔薇戦争なみである。

第2幕、化けたオバマ、消えかけたヒラリー

こうなるとオバマ対ヒラリーの戦いは、見た目以上の大差ということになる。

不思議なもので、事実上の選挙戦はこれまで1年近くも行われているし、オバマやヒラリーは、皆が以前から知っている人物である。しかし、実際に最初の黨員集会が行われて、そこで勝敗が決した瞬間に、勝利者はある種のオーラを帯び始める。分かりやすく言えば、「化ける」のである。オバマの演説は「マーチン・ルーサー・キング牧師以来」という評価を受け、一挙手一投足が好意的に報道されるようになった。

逆に3位に甘んじたヒラリー・クリントンは、敗戦処理をしなければならない。アイオワ州での彼女の敗戦の弁はまことに堂々としたものであった。しかしその右側にはビル・クリントンが所在なげに立っていたし、左隣に居たオルブライト元国務長官はいかにも高齢で疲労の色が濃かった。つまり、陣営には「嫌なムード」が流れていた。若い候補者が、「変化」を標榜してアピールしているのに、ヒラリーの両脇を固めているのは、1990年代の古くさい顔ぶれであったのだ。こういう「絵」が見えてしまうところが、テレビというメディアの恐ろしさとも言える。

これが例年であれば、次のニューハンプシャー州予備選までは時間的な余裕があり、態勢を立て直すチャンスがあった。しかし、2008年はスケジュールの前倒しにより、わずか中4日で次の勝負に立ち向かわなければならない。この時点でヒラリーの当選可能性は消えたと見るのが自然であった。

候補者たちの当選可能性を株に見立てて売買を行う”intrade”市場²では、ヒラリー株が70セントから一気に22セントにまで暴落した。逆にオバマ株は20セントから76セントに上昇。つまりネット上の仮想空間は、「オバマが候補指名獲得」を折り込んだのである。

1月7日のThe New York Times紙では、この日、初めて同紙の連載コラムニスト陣に加わった「ネオコンの総帥」ことウィリアム・クリストルが、記念すべき第1回のコラムの書き出しを以下のように始めている。

ありがとう、オバマ上院議員。あなたはアイオワでクリントン上院議員を破ってくれました。ニューハンプシャー州でもきつとやっつけてくれますよね。これでもクリントン王朝の復活はないでしょう。わが国はあなたに感謝の念を捧げるものであります。

今となっては、かなり恥ずかしい寄稿である。が、これを勘違いというのは気の毒であろう。政治のプロを自認する多くの人たちが、「ヒラリーは終わった」と判断した³。そして当のヒラリーは、この日の夕方に涙を見せるというハプニングまであった。おそらく1月7日夜は、彼女にとって生涯最悪の時間であったに違いない。

第3幕：ニューハンプシャーのサプライズ

NH州の結果は、 クリントン：39%、 オバマ：36%、 エドワーズ：17%

ところが結果は上記の通りであった。大統領選挙の予備選にはサプライズがつきものだが、これほどの逆転劇はそうあるものではない。今のところ、「前日の涙が女性有権者にアピールした」という解説がされている。そういう面がないとは言えないが、以下のように2つをセットで考えると、これはこれで納得のゆく答えなのではないかという気がする。

アイオワ州 ： 党員集会 オバマ（民主党）& ハッカビー（共和党）
NH州 ： 予備選挙 ヒラリー（民主党）& マッケイン（共和党）

² <http://www.intrade.com/jsp/intrade/contractSearch/>

³ 自慢話で恐縮だが、1月6日夜に「SPA！」編集部から電話取材を受けた筆者は、「オバマ氏は、この勢いのまま突っ走れるのか？」という問いに対して、「それは競馬で言うなら、弥生賞の結果だけを見て、その年のクラシックレースをすべて予想しろといってるようなものですね」と回答した。今週号の巻頭”People this week”ページ、File02「バラク・オバマ」で引用されています。

つまり、アイオワは「情と理想」の候補を選択し、ニューハンプシャーは「理と現実」の候補を選んだのではないかと思うのだ。

両州の答えが分かれた理由は3点考えられる。

(1) 経済状況の差

農業州のアイオワは、世界的「バイオ燃料ブーム」とブッシュ政権の農業補助金政策によって景気が良い。それに比べてニューハンプシャーは、お隣ボストンのベッドタウンでもあり、サブプライム問題などの経済状況の影響を受けやすい立場にある。当然のことながら、政治に対する期待は違ってくる。余裕のあるアイオワは候補者に「夢」を追い、ゆとりのないニューハンプシャーは「実力」を求めることになる。

ちなみに、昨年秋時点で圧倒的だったヒラリー人気低下理由のひとつに、イラク情勢の安定がある。イラク情勢が明日をも知れない間は、経験に勝るヒラリーへの支持が強かったが、ブッシュの増派が効果を挙げてイラク発のニュースがめっきり減り始めたことで、「即戦力」よりも「未知数」の方が魅力的に見えてきたのであろう。

(2) 選挙形式の違い

アイオワの党員集会（コーカス）では、近所の学校などの集会場で午後6時半から8時まで党員が集まり、皆で討議した上で、民主党は挙手で、共和党は投票で候補者を決定する⁴。特に民主党では、その場の雰囲気によって結果が大きく動くことになる。今回はオバマ支持の若者が多く参加し、彼らのアマチュア的な選挙運動が功を奏したのであろう。

他方、ニューハンプシャーの予備選挙（プライマリー）は、ごく普通の秘密投票であるから、事前の運動や組織力がモノを言う。また州民は、1992年の選挙でクリントン夫妻が同州で猛烈な運動を展開したことを覚えているのではないだろうか。実際に共和党側でも、2000年の予備選挙で勝ったマッケインが、今回も勝利している。

(3) 長年の伝統

歴史的に見て、ニューハンプシャーはアイオワと違う答えを出す伝統がある。よく言われる法則は、「アイオワで勝って大統領になったのはジミー・カーターのみ」であり、「ニューハンプシャーを落として大統領になったものはいない」である⁵。

1988年にはジョン・スヌヌNH州知事が、「アイオワはトウモロコシを選ぶが、ニューハンプシャーは大統領を選ぶ」との暴言を吐いている。「いつも俺たちの方が正しい選択をしている」という同州民の「意地」が働いたことも想像に難くない。

⁴ 久保文明東大教授の現地レポートを参照。<http://www.tkfd.or.jp/research/sub1.php?id=47>

⁵ もちろん例外はある。近年のニューハンプシャー州の選択はあまり当たらない。

両者の戦いはこれで先が読めなくなった。選挙資金の量ではほぼ互角。それ以外はあらゆる面で対照的である。本稿執筆時点(1月11日)で intrade の株価はヒラリー55.7セント、オバマ41.2セントと僅差。1.5セントのエドワーズは圏外に去ったと見ていだろう。

二者択一で、「情と理想」で選ぶならオバマ、「理と現実」で選ぶならヒラリー。今後の選挙戦において、全米の有権者はどちらの側に傾くのだろうか。

第4幕：なおも続く共和党の「自分探し」

「アイオワの情、ニューハンプシャーの理」という違いは、共和党の候補選出からも読み取ることができる。

IA州の結果は、ハッカビー：34.4%、ロムニー：25.2%、トンプソン：13.4%、マケイン：13.1%

NH州の結果は、マケイン：37%、ロムニー：32%、ハッカビー：11%、ジュリアーニ：9%、トンプソン：1%

アイオワが選んだマイク・ハッカビー元アーカンソー州知事は、もともと当選可能性が低いと見なされていた。政策はほとんど未知数であるし、選挙資金もさほど多くない。しかし宗教的右派が多い中西部では、牧師出身のハッカビーは人気がある。出口調査によれば、共和党の党员集会では実に参加者の6割が、自らを”Born-again or evangelical Christian”と認め、その46%がハッカビーに投票している。

おそらく 2008年の選挙戦を通して、宗教的右派の影響力は無視できないだろう。共和党の有力候補は揃って穏健派であるが、彼らは何らかの方法で保守派の支持を取り込まなければならない。また2004年と同様に、「社会的価値の問題」が争点として浮上する可能性は低くない。グローバル化やIT時代の陰で、家族や宗教などの社会的規範に対する有権者の関心が高まっているからだ。

選挙戦を通じ、ハッカビーは「レーガン以来」と呼ばれるようなコミュニケーターぶりを発揮した。党内保守派は、ようやく自分たちの声の受け皿を発見した。ハッカビーは最低でも、2008年のドラマの進行上「不可欠な脇役」の地位を確保したはずである。

他方、ニューハンプシャーが選んだマケインは、本来であれば「共和党の正統な候補者」たる地位を要求できる立場である。歴史的に見ると、共和党の候補者選びにはシンプルな法則がある。すなわち、「現職大統領がうまくいっているときは、その指示に従う。うまくいっていないときは、その前の予備選で大統領に負けた者が浮上する」。1964年のゴールドウォーター、1980年のレーガン、1996年のドールなどは、いずれも党内の予備選における敗者復活組である。

そうだとすれば、2008 年は 2000 年にブッシュで敗れたマッケインの出番ということになる。しかし、マッケインは 71 歳と高齢であり、党内保守派の受けも悪い。「評判のいいブッシュ減税に反対し、評判の悪いブッシュ増派に賛成する」というマイペースぶりも、仇になっていた感がある。

しかし、イラク情勢改善の追い風をもっとも受けたのはマッケインであった。彼はこの問題ではまったくブレておらず、「俺は正しかった」と言える立場である。目下のところ、**intrade でもマッケインが 37.0 セントと他候補をリードし**、以下、ジュリアーニ 26.5 セント、ハッカビー 17.2 セント、ロムニー 11.0 セント、トンプソン 3.3 セントと続く。

今のところ、共和党内の戦いは民主党に比べて今ひとつ盛り上がりを欠いている。しかし 11 月 4 日の本選挙になれば、どうしても 2000 年や 2004 年のような「ブルー州対レッド州」の最終計算になってくる。**民主党と共和党の勝率は、せいぜい 6 対 4 程度**であって、共和党内の戦い（自分探し？）にも大いに注目する必要があるだろう。

次回予告：今後の展開はどうか

2008 年の最初の 10 日間が過ぎて、米国大統領選の行方はますます混沌としてきた。

ヒラリー対オバマの戦いは、少なくとも 2 月 5 日のスーパーチューズデーまでは続くだろう。**この間の戦いは、政治に対する有権者の関心を高めることになるし、政策論争を深めることにもなる**。両者が極力、個人攻撃を避けていることも良い兆候である。

そもそも米大統領選とは、試練が山ほど用意してあって、それをひとつひとつ乗り越えていくことで候補者が鍛えられていくドラマである。この 10 日間でオバマは大化けたし、ヒラリーは絶望の淵から蘇った。候補者がそういうドラマを背負ってこそ、「合衆国大統領」には正統性が生まれるし、言動に重みも出るというものだ。

仮に将来、ヒラリー・クリントン大統領が誕生するとしたら、2008 年 1 月 7 日夜の経験こそが、彼女を偉大な指導者するかもしれない。長い大統領選の歴史の中でも、彼女ほどガチガチに準備を固めた候補は少ないだろう。しかし、勝利を得るためには不確実性を乗り越えなければならない。2008 年の選挙は引き続き大荒れが予想されるので、そういう機会には今後も事欠かないだろう。

あるいはバラク・オバマの著書『合衆国再生 大いなる希望を抱いて』（The Audacity of Hope）を読むと、党派を超えた価値観の問題などでは素晴らしいメッセージが込められているが、経済や外交といった具体的な問題になると、途端に記述が覚束なくなる。旧式なリベラル思考を、レトリックの妙で誤魔化しているような印象がある。オリジナルな政策を打ち出していくことにかけては、まだまだ伸び代があるといえそうだ⁶。

⁶ 例えばマイケル・ムーアは、自らのブログの中でオバマに対し、“But who is he? I mean, other than a guy who gives a great speech?”（彼は、偉大なスピーチをする以外に何ができるんだい？）と揶揄している。

今後の選挙日程

- 1月15日(火): ミシガン州予備選(共・民)
- 1月19日(土): ネバダ州党员集会(共・民)、サウスカロライナ州予備選(共)
- 1月26日(土): サウスカロライナ州予備選(民)
- 1月29日(火): フロリダ州予備選(共・民)
- 2月1日(金): メイン州党员集会(共)
- 2月5日(火): スーパーチューズデー(共・民)

この先の展開について、少し先走ったことを考えてみると、1月29日のフロリダ州が勝負どころとして浮かび上がってくる。ここはジュリアーニとヒラリーが以前から準備万端、資金と運動を注ぎ込んで他候補を待ち受けている場所だ。カリフォルニア、ニューヨーク、イリノイ、ジョージアなどの大票田が開くスーパーチューズデーの直前に、後方から一気に勝負をかけることができる。

面白いことに、その前日の1月28日にはブッシュ大統領の最後の一般教書演説が予定されている。サブプライム問題などの国内経済に対してどんな対策が打ち出されるか、そして1月8日から16日にかけての中東歴訪の成果がどう盛り込まれるかが注目される。選挙の政策論争に、格好の材料を提供することになるだろう。

今回の外遊では、ブッシュはイスラエル・パレスチナ自治区・クウェート・バーレーン・UAE・サウジアラビア・エジプトと多くの国を訪問する。歴史に名を残すために、2期8年の任期の最後になって中東和平に取り組むのはクリントン大統領と同じだが、もちろんイラク情勢やイラン核開発問題、それに石油価格の高止まりといった諸問題も控えている。フロリダ州はユダヤ系住民が多いので、中東政策が鍵を握るという事情もある。ヤマをかけるとしたら、経済問題よりもこちらの方が面白いだろう。

蛇足：ひるがえって日本は.....

最後にこれはないものねだりとなるが、米国政治の華々しいドラマに比べると、年頭10日間の国内政治の沈滞はいかかなものだろうか。1月9日に行われた福田首相對小沢代表の「党首討論」は、いくら「大連立騒動」の後とはいえ、あまりにも気の抜けたものに見えてしまった⁷。

是非、ヒラリー対オバマの真剣勝負を見習っていただきたいものである。

⁷ 「今年一杯は解散・総選挙もない」という予測が最近になって増えているような...

<今週の”The Economist”誌から>

”A call for change”
「変化を求める声」

United States
January 4th 2008 (電子版)

* 1月3日のアイオワ州党員集会直後、”The Economist”誌の選挙結果分析です。ニューハンプシャー州は無党派層が重要で、「オバマ対マッケイン」の戦いという結論が面白い。

<要旨>

ドラマチックな展開は誰もが好むところだが、最後はいつも強い者が勝つ。2000年の共和党予備選でのブッシュ対マッケインも、2004年の民主党予備選でのケリー対ディーンも、概ねそういう文脈であった。しかし2008年の米大統領選挙の緒戦では、2人の候補者が「あり得ない」勝利を得た。バラク・オバマとマイク・ハッカビーである。

オバマはこれまでもメディアのお気に入りだった。しかし民主党の頂点たるクリントン家に勝てたのは、前回の倍近い投票者の増加のお陰だろう。若者が増えたこともあり、10人中4人が第1回投票でオバマを選んだ。オバマは37.6%の票を獲得し、ヒラリーは29.5%とエドワーズの29.8%をも下回った。オバマはまた無党派から幅広く集票し、わずかな共和党员票も獲得した。女性層にも強かった。ヒラリーは「真の共和党员では支持は五分五分だ」と言うだろうが、オバマ陣営は、決選投票で勝つには党派を超えた支持が必要だとやり返すだろう。テーマは変化であり、アイオワ州民はオバマを選んだのである。

3位という結果にヒラリーは失望しただろうが、資金量でも組織力でも知名度でも磐石の態勢だ。次のニューハンプシャー州(NH)での支持率は、五分五分ないしは上回っている。エドワーズは苦しくなった。民主党内の争いは、二強対決に向かっているようだ。

共和党でも勝者と敗者が際立った。ハッカビーは9p差をつけて34%。ロムニーは25%。トンプソンとマッケインが13%ずつ、アイオワを捨てたジュリアーニは3.5%に留まった。

ロムニーの失望は深い。自己資金を含め、アイオワには巨額の選挙費用を投入していた。元福音派牧師のハッカビーは宗教右派共和党员にアピールしたが、モルモン教徒で、最近になって社会保守主義に転じたロムニーは受け入れられなかった。

しかし真の勝者はマッケインである。僅差の4位に終わったとはいえ、そもそもアイオワにはほとんど足を運んでいない。最近のメディアの注目は、アリゾナ州選出上院議員の復活に集まっている。次のNH州では隣州出身のロムニーに次ぐか、トップを取る勢い。ハッカビーの勝利を称えて、「アイオワは買収できない」と言ってみせた。

数十年に1度の激戦はこのままでは終わらない。来週火曜はNH州予備選だ。同州の無党派層はどちらの予備選にも投票できるが、そのチャンスは1回だけ。彼らがオバマの希望に雪崩を打てば、マッケインを見捨てることになる。マッケインの一匹狼スタイルに人気が集まれば、組織力に勝るヒラリーに軍配が上がるだろう。気まぐれな「剣が峰州」が、2人の重要候補のどちらかを助けるとは、まことに皮肉な展開といえよう。

< From the Editor > 予備選挙は特権か？

アイオワ州民 A 「どうしよう、ヒラリーに入れると人種差別 (Racist) と思われるぞ」

アイオワ州民 B 「しかしオバマに入れると、女性差別 (Sexist) に見られてしまう」

アイオワ州民 AB (同時に) 「そうだ、エドワーズに入れればいいんだ。あいつはどうせマイノリティ (Minority) だし」

子ども A 「大人になったら、権力の頂点に座ってやるんだ。すべての政治家が僕にひざまづくように」

子ども B 「ということは、あなたは大統領を目指すのね？」

子ども A 「いや、アイオワ州に引っ越すのさ」

早速、アイオワ発のこんなジョークが飛び交っているようです。

米国大統領選挙の予備選挙が、いつもかならずアイオワ州やニューハンプシャー州で始まるのは、他の州から見て不公平ではないのか？ こんな疑問が生じたとしても、不思議はないでしょう。アイオワの人口は 300 万人、ニューハンプシャーは 130 万人。いずれも白人の比率が 9 割以上であり、全米 3 億人のサンプルとして適当とは思えません。

ところが 4 年に 1 度、両州は全米の注目を集め、各候補はみずから乗り込んで選挙戦を展開します。メディアも総動員だし、世論調査も毎日のように行われる。経済効果も小さくないでしょうし、彼らの選択が全米の世論を左右するのは特権といえるでしょう。

しかし「大統領候補にとって最初の試練の場所」が、毎回変わるということになったら、過去の記録がまったく役に立たなくなります。大統領選の候補者たちは、過去の挑戦者たちと同じ場所で戦い、同じような試練を受ける。有権者はそれを見て、候補者に対する認識を形成してゆく。やはり競馬と同じで、データは大切にしなければなりません。

次にアイオワとニューハンプシャーが小さな州であるという点も、大勢の候補者が簡単に参加することができるというメリットがあります。これがニューヨークのような大きな州だと、巨額の広報費を持つ候補者しか参入できないことになるでしょう。

そして何より 2008 年もそうでしたが、この 2 つの州はなかなか味のある選択をするではありませんか。きっと、どちらの州にも愛すべき政治オタクたちがいて、4 年ごとのチャンスを心待ちにしているに違いありません。

* 多忙を極めてきましたので、不本意ながら当面は隔週ペースで発行することにしたいと思います。次号は 2008 年 1 月 25 日 (金) を予定しています。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記にてお願いします。

〒107-8655 東京都港区赤坂6-1-20 <http://www.sojitz-socket.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-4954

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com